

海外研修「インドネシア」に参加して

○後藤 伸太郎、 中西 幸弘、 山本 遼
名古屋大学 全学技術センター（工学） 装置開発技術系

1. はじめに

名古屋大学では以前から事務職員向けの海外研修が毎年実施されてきた。平成 28 年度から技術職員も参加する機会が与えられ、応募し採択された。海外研修における視察、交流について写真を交えて紹介し、概要を報告する。

2. 海外研修について

本研修には内容が予め決められているタイプ A と、訪問先（アジアに限定）、目的を自由に企画できるタイプ B がある。タイプ A は平成 28 年度の場合、カンボジア、ベトナム、フィリピンの 3 つのコースに分かれており、そのいずれかを選択する。

昨年度までの報告書に目を通すとタイプ A は事務職員向けの内容になっていた。そこで、我々は技術職員向けの内容にするためタイプ B を選択した。

3. 参加の背景と目的

名古屋大学は英語のみの授業も行うなど世界展開力の強化を図っており、我々の日常業務においても技術相談や公開講座などで留学生と関わる場面が多くなっている。その際、日本語が通じないことも多く意思疎通の難しさを痛感し、語学力の重要性和必要性を感じている。また、外国人との会話に対して若干の苦手意識も持っている。

本研修を通して外国人とのコミュニケーションに対する心理的な壁を壊し、また、訪問先における視察や意見交換を通して装置開発業務に関わる知見を広めることを目的とした。

4. スケジュール

本研修は 6 日間に渡って実施された。スケジュールを表 1 に示す。

表 1 スケジュール

10/16 (日)	中部国際空港発 スカルノ・ハッタ空港着
10/17 (月)	インドネシアン・エアロスペース (航空機製造会社) 訪問
10/18 (火)	バンドン工科大学訪問
10/19 (水)	インドネシア技術評価応用庁訪問
10/20 (木)	スカルノ・ハッタ空港発
10/21 (金)	中部国際空港着

5. 訪問先について

本研修において訪問した機関はインドネシアン・エアロスペース（以下 IAe）、バンドン工科大学（以下 ITB）、インドネシア技術評価応用庁（以下 BPPT）の 3 機関である。

IAe（図 1）はインドネシアの国策で設立された航空機製造会社であり、小型および中型のプロペラ機やヘリコプターなどの民間機、軍用機を製造している。軍に関わる機関であるため通常は関係者以外の見学が許可されることはないが、後述の BPPT から依頼していただいた経緯があり特別に許可された。



図 1 インドネシアン・エアロスペース



図 2 バンドン工科大学

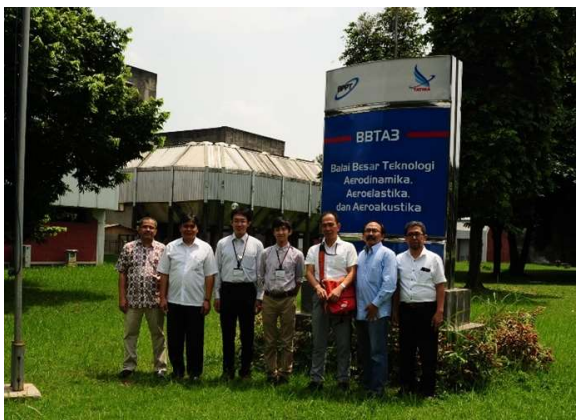


図 3 インドネシア技術評価応用庁

ITB (図 2) はインドネシアを代表する国立大学の 1 つであり、我々と同様の業務を担う技術職員を持つ大学であった。複数の工科系学部・学科がある中、本研修で交流を持ったのは工業技術学部の機械工学科と航空工学科である。

BPPT (図 3) はインドネシア政府の研究機関である。航空機設計に欠かせないシミュレーションや風洞実験をはじめ、実際に製造された航空機機体の疲労試験、工作機械の開発製造、科学技術の研究など多岐にわたる事業を担っている。

上記訪問先のすべてにおいて語学力向上のため、日本や名古屋大学、我々の職場を英語で紹介するプレゼンテーションを行った。また、各訪問先の施設や作業場の視察、意見交換を行った。さらに、ITB、BPPT においてはコミュニケーション能力を養うため、名古

屋大学の広報を兼ねたアンケート調査も行った。

インドネシア滞在中は 2 人の BPPT 職員が世話役として常に同行して下さり、すべての予定を滞り無く進められた。世話役を引き受けて下さった方の内 1 人は、かつて名古屋大学に在学した留学経験をもつ方である。

6. 得られた成果

英語でのプレゼンテーションやアンケート調査、現地の人との交流を通して、外国人との会話に対する苦手意識を払拭し、語学力向上の意欲が強くなったことを感じる。また、それぞれの訪問先で我々の日常業務と内容が似ている加工工場や、ものづくりに欠かせない重要な部署を一通り視察し、意見交換することで日常業務に参考となる知見を広めることができた。これらのことから、本研修に応募した当初の目的を達成できたと考えている。さらに、訪問先各所で知り合えた方々と帰国後にメールのやり取りをするなど、海外の人脈を作る第一歩が踏み出せた。

7. 今後の展望

ITB においては試作工場の立ち上げ中ということもあり何らかの提携を図りたい旨のお話を頂いた。名古屋大学の一職員として、国際化や協力体制構築の観点からも前向きに取り組んでゆきたいと考えている。また、今回の研修には史跡見学等を含める時間的余裕がなかった。再び機会が得られれば現地の文化や歴史に触れるような企画も取り入れ、より見識を深めてゆきたい。

8. おわりに

発表の機会を与えて下さったみなさま、本研修の実施に際してお世話になったみなさまにこの場をお借りして感謝します。

連絡先

E-mail : shintaro_g@etech.engg.nagoya-u.ac.jp